

特別講演一

貌としてのアーカイブズ

大濱 徹也

一、アーカイブズといわれる世界

私は、こちらの文書館の前身である五十年史編集室を、筑波大学にいましたときに訪れました。筑波大学で文書館をつくる構想を出しまして、江崎玲於奈学長が乗ってくれたもので、うかがった次第です。結局、私は筑波大学を去って、筑波大学文書館をつくることができなかつただけに、ここに開設された広島大学文書館の姿を見て、大変うれしく思っております。また、今日このような盛大なシンポジウムがもたれることは、日本の大学アーカイブズをどうするかという点から言っても、大変に興味のあることだろうと思います。

今日、私がここに「貌としてのアーカイブズ」という問題を提示しましたのは、日本におけるアーカイブズの位置づけをめぐり、先ほど小池さんが、広島大学文書館は「もんじょかん」ではなく「ぶんじょかん」だという言い方で発題をしましたが、日本ではこのような施設を文書館（もんじょかん）と言うか、文書館（ぶんじょかん）と言うか、公文書館（こうぶんじょかん）と言うかで、長々と議論をしたことが前提にあります。

いつもアーカイブズというもので思い出すのは、『ニルスの不思議な旅』という物語です。『ニルスの不思議な旅』という物語がなぜつ

くられたかという点、スウェーデンという国が農業国から工業国になる過程で、しかも帝政ロシアの圧政のなかで常におびえているなかで、近代化をしていかなければならない。そのようなときに、政府がセルマ・ラーゲルレーヴという作家に頼んだのは、スウェーデンの国民に、スウェーデンの国というのはどんな国で、どういう国民からなるのかということ、よく教えてほしい、そういう小説を書いてほしいということ、そこでできたのが『ニルスの不思議な旅』。いたずらつ子のニルスが小人にされて、雁の群れと一緒に、いろいろなところを旅していくなかで、ラップランドにはこんなに多様な暮しがあるというのを知っていつてもらう。スウェーデンの国というのは、こういう人々がいて、多様な生活をしており、それぞれ地域で異なるけれども、それがみんなスウェーデン国民である。その旅の問いかけをふまえ、スウェーデン国民としての記憶を共有することによって、スウェーデンという国が、新しい国民国家といえますか、新しい国家に生まれてくる。あの物語は、そのような国民統合の器を用意してくれる物語として書かれた。

実は、アーカイブズというものは、そのアーカイブズを持っている組織の構成員たちが、その構成員であるという記憶を共有することによって、あらためて、次の新しい時代をどう切り開いていくかということ、それを学ぶ。そのようなことを身につける場が、アーカイブズと言われる一つの大きな世界だと思ふ。ですからアーカイブズと言われる世界にあるのは、それぞれの組織が持っている記録というものを、体系的に、いかに保存し残していくか。そしてその記録から何を読み取っ

ていくかというのが、アーカイブズに課せられている使命になりません。

そこで、このアーカイブズと言われる世界を考えると、一番最初に確認したい問題として、日本でのアーカイブズの運動というのはどうだったのかと言うことです。日本では、これをしばしば歴史の「史料」をつけた史料保存運動というかたちで展開してきました。この課題に最も積極的にかかわったのは、近世江戸時代の各地の庄屋をはじめとする近世地方史料を、いかに保存していくかということが、大きな使命としてありました。その背景には、戦後民主化のなかで、どうやって日本の封建遺制を克服するか、封建制をいかに批判していくかという学問的課題からくる史料調査への情熱が、強くありました。ですから、その間においては、地主制の問題や家の問題などについての史料を、歴史研究者たちは非常に重要視しました。そういった意味で言えば、近世地方の史料保存運動をやるなかで、そうした史料保存の一つの場として、文部省史料館というようなものができたことは意味がある。ただ歴史研究者たちの研究意識は、その時代の学問的関心に非常に強くとらわれている。とらわれているがゆえに、その学問的関心から抜け落ちた部分については、文書整理のなかでしばしば「雑」として扱うことよって、多くの記録や資料が消えていくという問題がありました。

こうした戦後の歴史学界を中心とした史料保存運動の流れに沿うなかにおいて、日本では一九五九年に学術会議が、当時の岸信介総理に「学問的に重要な近代の公文書を残せ。それを残さないかぎり日本

の近代史は書けないのだ」という要請をします。そういう動きのなかで、一九七一年に国立公文書館が誕生するわけです。ただ、このこと自体はとても意味のあることですが、そこにおいては、あくまで学問研究ということが盛んに強く主張されていた。そのことにより、どうしてもアーカイブズは、学問研究の場であり、歴史研究者たちのためにある施設だというふうに思い見なされてきたことが、大きな落とし穴になったのではないのでしょうか。

しかしながら、記録を残していくということは、いったいどういうことか。例えば、日本で中世の荘園制度などの記録について、最もすぐれた資料としては、京都の東寺が残してきた『東寺百合文書』があります。この『東寺百合文書』というものが、なぜ世に多く残されたかと言うと、東寺という寺の経営と荘園管理の必要性のなかから残されてきた。それは決して、中世の荘園を研究してくださいというのではなくて、その東寺が管理する荘園を、どのように自分のものにしていくか。そのことの証しをどのように主張するか。そのような証しとして、東寺は寺院の経営管理にかかわる記録を残してきた。そのところが大事だろうと思います。

あるいは一六世紀に、日本はキリシタンの時代と言われるぐらいイエズス会の宣教が活発に展開していました。このイエズス会の記録というの、例えば現在、ルイス・フロイスの『日本史』や、イエズス会宣教師の書簡などというかたちで、手に取って見ることが出来ます。ではイエズス会がなぜそのような記録を多く残したのでしょうか。イエズス会は全世界に布教戦略を展開していくときに、各地の宣教師が

勝手に宣教されては困るので、ローマの本部がそれぞれの宣教師たちに、管区長なり、布教長をとおした一つの報告書を出させた。それとともに各宣教師は、もし必要があるならば、直接ローマに手紙を出してもいいと。要するに各宣教師は、教区長や布教長に自分の一年間の実績を報告する。それをもとに管区長は本国に、今年の日本管区区況はどうかということ報告します。それ以外に、各宣教師たちに自分は何をやったかということ報告させます。なぜ、そのようなことをしたかと言うと、それぞれの出先機関が勝手に動き出すことに対する不安がありました。ですから、その報告書の書き方は詳細に規定されています。まず、その国の政治状況や社会状況はどうであるのか。どんな布教をしたか。どういう改宗者が出たか。どういう弾圧があったか。そのときに、その弾圧者を悪し様にのしるのではなく、客観的に書きなさいと言っているわけです。自分がやった功績を書くのはいいが、それもちゃんと裏付けがあるものをもとにして報告しなさい。イエズス会は、これらの報告等を編纂して、アニユアルレポート、年報を出します。その年報は、イエズス会に活動資金を拠出したポルトガルをはじめとするヨーロッパの王侯貴族に送り、あらためて活動資金をもらう。こういうやり方をしています。

まさに、イエズス会は、ある意味では現代の情報戦略の最も先駆けをしていた組織といえます。一九世紀に日本にきたアメリカやイギリスのプロテスタント教会も、それをまねて、アニユアルレポートというのを毎年出して支持者に配り、日本宣教資金をもらっている。いま、イエズス会が営んだ事柄を参考とすれば、日本の企業が出先の出張所

に対して、出張所長の年次報告とともに、そのセールスマンにそれぞれの報告書を手紙で出させるということをするれば、かなりすぐれた経営管理ができるだろうと思います。いわばイエズス会の記録というのは、一六世紀の歴史状況を描いた資料である前に、まさにイエズス会という組織の経営戦略のなから生み出されたものなのです。いわば宣教師たちは、各自がどのような実績をあげたのかという証しを、そこに認めていた。

このような感覚は、日本のなかではどうだったかと言うと、非常にすぐれた知性を持ったひとりの儒者、政治指南番でもあった荻生徂徠にみることでできます。荻生徂徠の『政談』を読んでいて非常にしるいのは、具体的な現実政治を、吉宗なり、あるいは柳沢吉保など時の為政者に説いていることです。そのなかで彼は、役所の人員整理をして、決して辞めさせてはならないのが留役だと。留役というのは、その業務の仕事を書き残す人物です。その組織に留帳がきちんと残っているならば、いかなる人が来ようと業務は引き継げる。一番悪いのは、新参者が来たときに古くからいる年配者がぼちぼち教えるから、器量がある人間であっても、すぐにその器量が発揮できない。留帳があれば、その役所が何をやっているのかが留帳を見ればわかるから、器量人がいるならば、すぐにその留帳を読むことによって、仕事を理解し、こういうことがやれるということが見える。そういう意味において、組織では留役と留帳というものをきちんと管理しろと言っています。実際に日本において、この提言がどれだけ生かされたのでしょうか。

役所文化というものは、考えてみれば前任将校というか、前任者がそれなりの力を持つのは、その故事慣例というものを知っていて、新参者が入ると「君、それはうちではなじまないよ」というかたちで新しい試みを牽制するわけです。聞くところによれば各部署には、内部秘としてのマニュアルで引き継ぎはできる。ただ問題なのは、そういうのはほとんど国立公文書館に送ってきません。ですから業務の実態は、なかなかわからないわけですが、少なくとも、そういうやり方をやっています。

そういう点で見ると、アーカイブズといわれるものは、単なる歴史研究や歴史資料ではなくて、組織運営の効率向上や、組織の点検をふまえて組織文化を継承していく、発展していく場だということだと思います。さらに言えば、市民革命以前の前近代におけるアーカイブズというのは、王の貌であり、教会の貌だった。王や教会の権威や権力を示す場がアーカイブズだった。そして、それぞれに組織を統治する秘密を握ることによって、まさにアーカイブズが持っている知を独占することによって、王なり、教会なり、あるいは官僚というものは、自己のステータスを保っていたのだと。では、市民革命を終えたあととはどうなるかという点、知の独占が開放され、独占していた知と情報が市民や国民に開放されることによって、アーカイブズは国民や市民の権利の保障の場と位置づけられ、あるいは市民や国民がそれぞれの義務を確認する場になっていきます。こうした一つの現在の流れが今日の情報公開をうながしたのです。

要するにアーカイブズは、国民や市民が持っている権利や証しを確

認する場であるとともに、市民であることの義務をそこであらためて認識する。別な言い方をすれば、アーカイブズが持っている記録を読むことによって、アーカイブズのあり方、暴走する権力をチェックすることが可能になっている。そういうものとしてアーカイブズを位置づけたがゆえに、アーカイブズのあり方は文明の尺度であるし、その国民の文化度を示すものだと出ることが出来るわけです。

そのような点で言えば、アーカイブズを設置する理由は何なのか。第一が、政府の能率の向上、マネジメントというものにかかわります。

第二が、そのような政府の文化性を示します。第三が、個人的な利害にかかわります。いわば、そこにある記録が、公民の権利や特権に対する根本的な証拠になるか、ならないか。さらに、国民と政府の関係で言うならば、政府というものを国民がどのようなかたちでチェックし得るか、という使命がアーカイブズには負わされています。ですから本来、アーカイブズというものは、政治・経済的、あるいは住民の基本的権利に関する問題に深く関わっている器なのです。そして第四点としては、公的には政府の機構とその構成をなしている根本的な機構や機能というものを、アーカイブズが保障することによって、政府の系統的運営を保つていく場。それがアーカイブズに課せられていた本質的に担うべき役割です。

日本の場合、このようなアーカイブズの問題が史料保存運動とかたちで提起されることによって、十分に理解されないまま、現在まで来ているのではないのでしょうか。まさに、アーカイブズはそのような意味において見れば、国民と国家、国民と政府という契約関係とい

うような基本を保障する場であるということを確認しておかねばなりません。このことは、組織の構成員と、その組織を成り立たせる世界との関係で言えば、アーカイブズというものはヘゲモニーにかかわる場だろうと私は思っています。

なぜ、ヘゲモニーということを使うかというと、ロシア革命の指導者であったレーニンのもので読んでみますと、非常に激しい党内闘争をやっているときに、レーニンがしばしば「何月何日の委員会記録を読んでみる。そこには私の言っているこれが出ているだろう」と言っている。それを読んだときには、あの激しい革命闘争のなかで委員会が記録を取っているというのには、まずびっくりした。といいますのは、それまでの日本の革命運動で委員会が記録を取らないのは、弾圧が激しいからだ、みんな聞かされてきたわけです。そういう日本の常識から見れば、ロシアの革命党においては党内闘争を委員会の記録を読むことによって自己主張し、自分の優位性を保つていこうとすることがたちで展開しています。

日本の社会主義運動をはじめとする反体制運動の研究は、ある意味で言えば、官憲の記録に多く頼らなければなりません。ですから逆に言えば、多くの革命神話が生まれてきた。そのことに気づいた石堂清倫という方は、運動史研究会をつくり、そこで運動にかかわった鍋山貞親をはじめとする、いろいろな関係者のオーラルヒストリーを記録していきます。それは、彼にとってみれば、日本の運動というものをどう再構築するかという課題があつて、運動があまりに伝説に包まれたなかにおいては、戦略も提起できないのだということに気づいたか

らです。石堂は、非合法共産党運動から転向したあと、満鉄（南満州鉄道会社）に入ります。満鉄のライブラリアンのような仕事をする一方で、満鉄の記録部門を図書部とアーカイブズ部門に分けた。そういう経緯が、ここで生きてきているわけです。

アーカイブズは、このような事柄で見ると、国民や市民や、ある組織が持っている構成員の権利の保障と義務を自覚させる場であるし、組織間における自己主張、自己の存在を問うる記録資料がある器がアーカイブズだと言えます。このことは、それぞれの個人なり、組織が持っている優位性、ある意味でのヘゲモニーを問うことを可能とします。ここでヘゲモニーと私が言うのは、組織なり個人が、自らの道徳的、政治的、文化的優位性を主張し、他者を説得する根拠を提示する。決して権力的に、あるいは権威的に望むのではなく、他者を説得できる論拠を持って、その文化的、道徳的優位性を主張し得るか否か。そういう論拠となる記録や資料を残しているかどうか、アーカイブズというものに問われるのだろうと思います。

ですから現在、よく町村合併で資料がなくなつて、それでは歴史が書けないという問いを私が受けるときに言うのですが、そうではなくて、町村合併をするならば、その町や村が営んできた歩みというもの、その町が営んでいた政策の優位性というものを問う上においても、記録を残していくことが、新たに合併した行政区においていままでもその町や村が営んできた政策のよさを主張できるのだと。そういうふうにな主張しなにかぎり、おそらく町村合併のなかにおいて、単なる歴史資料というかたちにするならば、それは古いだけで、相手にされないだ

ろうと言うのです。存在の証しであることへの自覚、そういうものより多く残せるか、否かが、自らの主張につながる、支えるのではないのでしょうか。公文書館を設置する、アーカイブズをつくるというのは、そういう各々がもつ存在根拠を問うものだという事です。それだけに、この記録を踏まえて、記憶を共有していくということが問われているのです。そこで教育の場ではアーカイブズがどう位置づけられているかということ、つぎに考えてみたいと思います。

二、学校の記録は問いかける

学校の記録は何を問いかけるかという問題で、いくつかの事例を紹介したいと思います。日本の小学校で、記念室のようなものを積極的につくらせていくのが日露戦争時です。日露戦争時にしばしばつくられてくるのが、村や町から出た出征兵士の記録を、なるべく一室に残し、生徒にそれをおして戦争を理解させなさいという言い方がされております。そういうものが、のちに小学校などの記念室となつてきます。それは当時の村の英雄なり、英霊の記憶を共有していくものとしてあります。さらに日露戦争のあとで「地方改良運動」というのがおこなわれ、広島県では広村をはじめとして、かなりの模範村ができます。そういうところで見られるのは、町村是。町是や村是のようなものをつくり、どのようなかたちで村を建てなおすかというときに、必ず歴史から書くわけです。要するに、かつてこの村はどうであったかということを確認する作業から出てきます。ですからそのときには、

かなりの記録が読み直されています。

千葉県の上総一ノ宮では、旧藩主加納久宜、鹿児島県知事として農事改良をなし、帝国農会初代会長となった人物が、故地一ノ宮の町長になります。そのときに加納は、まずはじめに、文書を整理をするなかで、事務の形態を整理していきます。一つの日本型アーカイブズの発想といえます。つまり町村改良では、学校を軸にした一つのアーカイブズ的なもの、記念室的なものをつくりながら、子どもたちに学校の記憶をおして、村の記憶を考えていく場をつくる営みがみられます。そのような名残が現在でも見られますのは、例えば富山県高岡の博労小学校です。古い小学校ですが、そこは子どもたちの卒業作品をすべて残す努力をしており、残されてきた書と絵画を百年史というかたちでまとめている。また東京都では、北区の王子小学校にもそのような資料が残されています。

おそらく、こういうことは全国の学校でこころみられていたのでしょうが、現在まで残ったのがさきの小学校なのだろうと思います。そこにある記録や資料から、いま考えてみるならば、当時の子どもたちがどういうかたちで教育を受け、どのような授業がなされていたかということが見られるわけです。さらに一九二〇年代から一九三〇年代にかけて、日本の学校では「大正新教育」といわれる新しい教育運動が起こってきます。その教育運動の記録というのは、いくつものところに残っております。当時そのなかでおこなわれたものに、合科教育というのがあります。現在でいえば、総合的学習といわれるもののが先駆です。その合科教育の記録が、学校の記録のなかにはかなりあり

ます。しかし残念ながら、現在の学校教育のなかでは、そういう記録をもう一度読み直すことによつて地域に根ざした学校の教育を考えようという試みが、非常に乏しい。それは逆に言えば、自らが営んだ記録に目を向けることなく、次から次に時代に流され、「新しい」授業を展開していくなかにおいて、学校が地域のなかでだんだん浮いてきた。そのような問題があります。

要するに学校の記録というものは、ある意味では、学校を成り立たせているその地域の記録であるし、その学校をめぐる記憶を共有していくことが、地域を新たにしていくことになるわけです。その地域の学校の歩みを知ることとは、地域の歩みを知ることであり、それは何も古い過去を知ることではなくて、これからの学校をどうしていこうかということが、その記録を生み出させたものだったと言えます。そうした各地の地域固有の記録への取り組みが、先ほど見たような合科教育に見られるわけです。学校が置かれている教育の現状を、学校の記念室などに残されている記録をもとに、教員と生徒がそれぞれに記録を確認しながら地域の明日をどうしていくかという思いが、このことを可能にしていたということがあります。この営みを見てみると、まさに大学アーカイブズの原点は、ここにあるのではないのでしょうか。

三、大学アーカイブズの営み

そのような点で言えば、大学アーカイブズの営みをどのように考えるのかという問題が出てきます。大学アーカイブズというものを見て

みますと、この広島大学もその一つですが、多くの大学が大学史編纂事業の結果として誕生してくる。そうした意味で言えば、歴史編纂事業の終幕として、大学アーカイブズというものがつくられている面がある。それは自治体アーカイブズが、自治体史編纂の一つの結末としてつくられてくると似ている。では、その幕引きとしてのアーカイブズをつくるのかと言うと、そうではなくて、まさにアーカイブズはつくられた歴史を、新たにつくり替えていく場だと位置づける必要があると思います。

そこで、アーカイブズが存在する、その成り立たしめている根拠というものを思い起こしてみたいと思います。先ほど言いましたように、一つは組織運営の効率と向上であるし、文化的なものということでは、大学にとつては、研究、教育の質をいかに大学アーカイブズが保障するかということにもなります。いかに保障するかということは、その大学アーカイブズに残された記録をもとに、大学の研究とは、教育とは何かを、常に問い質していけるかどうかということです。さらに、個人の利害のあり方という問題で言えば、卒業生、教職員、学生の諸権利に関する証しであるし、根拠になるもので、さらには、教職員や学生と大学当局との関係を規定する経済的、政治的諸権利の問題が、そこで問われてくる。それは、まさにマネジメントという問題にかかわってきます。さらに大学が守るべき、保障すべき、あるいは政治的な、財政的な、法的根拠というものが、大学アーカイブズをとおして、常に問い質されていかなければならない。

では日本の大学アーカイブズは、このような課題にどれだけ答え得

るだろうか。それは実際上において、現実的には非常に厳しい状況に置かれております。要するに、大学という組織の記録の系統的保存だとか、活用だとか、組織運営の効率化、組織の自己認識、そのようなものとして位置づけられているのでしょうか。頭ではわかっているけれども、現実的にそのような位置づけが非常に乏しいわけです。それだけにおさらのこと、大学アーカイブズには、大学にいる人間が教職員であれ、学生であれ、私の大学とは何なのかという自己確認をなし得る場として、どのように位置づけられていくかということが問われています。

そういった点で言えば、大学アーカイブズは、大学改革と非常に強く結びついております。そして現在のように、国立大学が、ある意味で言えばサバイバルレースのなかで、生き残りをどうするかというときに、それぞれ自らの固有の大学としてのあり方、知の府、知の遺産を担う場として、どこまで自覚的であり得るかということでもあります。

例えば東京大学史料室がありますが、その史料室にいる畑野勇さんが、昨年の私ども国立公文書館の専門職員養成課程に来たときの修了研究論文で、「大学アーカイブズの存在意義」という論文を提出しました。そのなかで彼は、「東大の歴史を振り返り、現在の大学の進む進路を見極めるための立脚点とする。そういう目的として利用されなければならぬのに、そういう利用はまったくされない。積極的存在意義すら与えられていない。学内他部局から大学アーカイブズの存在意義の認識も皆無である」と、室員の目からみた現状を、非常に絶望的に紹介しております。そういう状況が、ある意味では一般的なの

ではないでしょうか。本来は、大学史編纂事業のなかで生まれた東京大学の大学アーカイブズは、組織の自己点検、発見、反省をおこなう上で、記録が非常に有用なのだということを主張するけれども、それがなかなか学内的な理解を得られない。せいぜい訪れて来る利用者は、大学史の誰かの歴史を調べるとか、何かというかたちでの問い合わせはあるけれども、組織内において、大学アーカイブズというものの活用はされていない、という言い方をしております。この状況は、ある意味で言えば、日本の置かれた一つの状況。大学アーカイブズだけではなくて、自治体アーカイブズにしても、そのような側面が常にあります。

そうしたなかにおいて、大学の自己点検の場となし、大学アーカイブズの存在意義を学内研究者のみならず、広く学内行政にかかわる人たちにも持つてもらわなくてはならない。しかし現実にはそうではないから、結局、この大学アーカイブズは、行政文書の単なる保管庫にされてしまうという、そのようなつらい現実を彼は言っております。

では、大学アーカイブズのあり方が問われているわけですが、その大学アーカイブズの現状はどうであるか。例えば、最も早くできた京都大学は、「情報公開法」というなかで情報の開示を軸にしてつくられたきた。そのために、それなりの一つの存在意義というものを模索しております。また金沢大学もそのようなかたちで、いま考えを具体化しております。ある意味では、大学コミュニティの場として、大学をめぐる記憶を、どのようなかたちでアーカイブズをもとに共有していくかということが考えられています。それは、大学史編纂事業を単

なる記念誌づくりではなく、明日の大学をつくるものとして結びつけるためには、大学アーカイブズというものを、もつと生かさなければならぬという思いがあります。例えば九州大学の大学史料室の場合同様、一つは学内において、学生たちへ九州大学とは何かという問いかけをする営みをおし、積極的に、明日の大学像を提示しようとしています。これは非常にすぐれた方策です。

あるいは私立大学で見ると、立教学院史料センターは、自己の立場の自己認識。ミツシヨンスクールとしての自己確認をするために、国際的環境のなかで、日本のミツシヨンスクールとしての立教学院はどうだったのかという課題を、戦争中のミツシヨンスクールは何をしたか、その信仰の証を具体的に問い質すべく、「戦争とミツシヨンスクール」というような共同研究をおして、学内に広く問いかけています。また桃山学院史料室では、大学紛争は桃山学院にとって何だったのかということ、ずっと問いかけ続けながら、もう一つは聖公会の学校として日本聖公会が日本布教ではたした軌跡を検証しようとしています。そこでは、各々がその存在根拠を問う作業をおし、単に過去の歴史をカビの生えた歴史として描くのではなく、歴史を読むことは明日につながるのだという思いが強く出てきております。

そうした点で言えば、各大学が年史編纂の営みというものを踏まえながらも、大学アーカイブズとして、どう自立し、その存在根拠を問い質すか、そういう苦闘をしているのが、日本の大学の現状といえます。いわば年史編纂の場という現状が多いなかにおいて、その現状を克服し、大学アーカイブズを広く学内、さらに、その大学を生み育

てる社会に位置づけていくためには、どう考えればいいのか。そこで記憶の蘇生と共有という問題を考えたいと思います。

四、記憶の蘇生と共有

なにゆえ大学は存在し得るか。ここでは、大学協団体というか、大学コミュニティをいかなるものとして位置づけるかということが問われております。大学というのは、そこにいる教員や学者と称する人たちの研究の場であるのではなくて、研究と教育の場であるならば、その研究と教育はコミュニティにとつてどのような意味を持つのかということが、いま非常に問われています。それだけに、大学に属する者たちは、自分の大学の構成員のみならず、社会といかに切り結んでいくかという課題がつきつけられています。そのような意味で言えばアーカイブズというのは、当該組織なり、社会が営んできた知をいかに継承し、明日につなげていくかというのを問い質す場です。それだけに、大学というコミュニティの営みをめぐる記録を、広く構成員が共有していくことが求められています。

先ほど紹介しました立教学院が、ミツシヨンスクールとして多くの外国からの援助を受けながら、時代のなかで、その戦争の時代というものに、どのような記憶を共有しようとしたのかを問い質そうとするのも、そのような動きの一つです。その記憶の共有をすること、確かめることによつて、明日の大学をどうつくるかということが、この問う作業のなかにはあります。そのような点で言えば、アーカイブズは

単なる歴史古文書館としての性格だけでは終わらないわけです。

この歴史古文書館的な性格を非常に強く持っているのが、滋賀大学経済学部附属史料館です。この史料館は、滋賀県内の近江商人の記録というものを最も多く集めた、近江商人研究のメッカです。そこにおいては、単に近江商人はこうであったというだけで収まっているのではなく、それを滋賀大教育学部の教員養成課程や、生涯教育などの人たちに、史料館をもとにして、どのような教育プログラムをつくるか、地域教育として地域の記憶をいかに共有し、明日を創造するか、近江商人のモラルを検証し、現在の経済活動をささえるエートスを問う営みがうかがえます。これは非常にすぐれた一つのやり方だろうと思います。それぞれ教師となった者たちが、自分の足元を見るなかで明日の教育を考えられればいいという意図が、そこに秘められているのだろうと思います。

また、経済学部の経済経営研究所には、彦根高等商業学校時代に収集した、朝鮮、中国、満州にかかわる植民地関係の非常に膨大な経済情報の資料があります。それを活用することによって、現在の彦根のまちづくりなどを見ようとしています。現在、この経済経営研究所が、デジタルアーカイブで「三中井展」というのをやっています。それは、近江商人のなかでも半島から大陸に進出し、デパートなどいろいろな事業を営んだ三中井の記録を、デジタルアーカイブで紹介している。そこには、単に過去がこうであったからではなく、その三中井が、いま彦根のまちでこういうキーキ屋をやっているということを紹介し、地域・彦根を場として日本資本主義を問う目があります。

こうした問いかけは、滋賀大学経済学部を支える彦根のまちにとつて、滋賀大学が何であるかということの一つのアピールにもなっているわけです。その教職員の方は、まさに手仕事でこのデジタルアーカイブをつくっているわけですが、私はそういう営みが、大学が地域社会に認知されていく上で非常に重要なことだろうと思います。ここには、地域に根ざした教育研究を模索する大学の地域への目ともいうべきものが、そこに読み取ることができます。九州大学大学史料室が言っておられる大学改革の問題や、石炭研究資料センターへの目など、そのようなものは、大学が単なる漠然とした国家との関係性であるのではなく、その地域にどれだけ根ざしているか否かということを問われているから、出てきたものであります。

大学コミュニティとして過去の記録をどう読み、それをめぐる記憶をどうよみがえらせていくのか。その構成員たちが、自分はその大学の一員であるということ、このアーカイブズの記録をもとにして共有し得るかどうか。私にとって大学とは何かという問題を、この大学アーカイブズのなかから学び取っていくのです。それでこそ、まさにアーカイブズが大学の貌になることができるのでありたいと思います。

先ほどから、しばしば記憶ということを行っています。実は二年前に、東アジア地域の国際公文書館の会議がありました。EASTICA (国際公文書館会議東アジア地域支部) と言います。今週の月曜日から金曜日までは、二〇〇四年のEASTICAが釜山でおこなわれ、私はそれに出席し、そのままこちらにきました。このEASTICA

二〇〇二年の会議がマカオでおこなわれたときに、国際公文書館会議 ICA の法制部会もたれ、その部会に出席していたパレスチナの委員が、*“Palestine people without memory”* と題する印象に残る話をしました。その発題、「記憶を奪われた、失ったパレスチナの人民」が問いかけたのは、パレスチナの人々は、パレスチナの記録というものを、イスラエルやアメリカやフランスに全部持っていかれてしまっている。どうかその記録を返してほしい。その記録を返してくれないかぎり、パレスチナ人民というもの、パレスチナ人というものの存在すら危うくなつてくると。

ここにアーカイブズが担うべき世界があります。記録を奪うこと、記録の府を破壊するということは、民族の根源を破壊することになるということ。民族だとか、国家だとか、コミュニティというものの魂を否定されたことになります。だからこそ、ボスニアなどにおける民族浄化のときに何がおこったかというところ、アーカイブズと図書館と博物館を、徹底的に破壊していく行為がおこなわれたそうです。それはまさに、記憶を奪うことが民族の浄化にかかわっていたということにほかなりません。それだけに、現在、大学が多様なかたちで生き残りをかけて、新たに大学を覚醒していく上で必要なことは、大学としての自己確立、大学の構成員のメモリーをどれだけ保障し得るか否かというところが問われているのです。

そのような意味で見ると、広島大学が森戸文庫というかたちで、新生広島大学の初代学長の記録を残し、そのなかで、新生広島大学が掲げた大学の理念を常に問いなおす場にしたということは、私は大変

意味のあることだろうと考えております。まさにそれは、広島大学が時代ごとに変化しながらも、常にその時代のなかで、明日をどのように生きるかというときに、そこに残された記録を読み直すことによつて自己覚醒をしていく器になり得る、非常に大きな財産を持ったということです。

五、経営と戦略の府として

最後に、そのような大学アーカイブズは、その点で言えば経営と戦略の府だということです。先ほどのごあいさつで、木田先生がマネジメントということを言われましたが、まさに大学アーカイブズは、大学のマネジメントをする上で、最も欠かせない組織です。日本の国立大学が、ある意味で言えば長期展望を描けないまま自己閉塞的になってきたのは、まさに大学にいる構成員たちが、たこつば型のなかに埋没し、自らの大学をどのようにするかというマネジメントを失った結果です。

現在、大学に問われているのは、大学の自己覚醒であるし、自立的にそれをどれだけなし得るかということです。その点で言えば、大学アーカイブズは、大学の組織的営みをどれだけ体系的に残し伝えることで、知の遺産を構成員が共有していけるものになし得るかどうかということが問われています。第二点として、その遺産を活用すること、どれだけ構成員、あるいは教職員や学生、卒業生が、自己の大学として自己の場をどれだけ確認し得るか。おそらく、その一つの小さ

な試みが、大学史・自校史という講座のなかにあるのだろうかと思えます。第三点としては、大学を存立せしめている社会への説明責任が問われています。我々は、自分のやっている学問が、いかに「高尚な研究」であるかということ、自己満足的に説いてもだめなのです。その研究が、社会に何をもちたらずのかということ、はたして研究者はどれだけ説明できるかと言うと、大学のなかで見れば見るほど非常に危ういのではないのでしょうか。本人は非常にすぐれた世界的な研究だと言うけれども、その研究が何かということ、ごく普通の素人の人に、自分の言葉でどれだけ説明し得るか。そのようなことが問われている。

研究というと非常に高尚なように思うけれども、研究というのは、実は大工さんが鉋を削る、いかに上手に削るのかということと同じことです。大きく違うのは、鉋の削り方は鉋の削りかすを見れば上手か下手かわかりますけれども、研究はそれがわかりません。そのような点で言えば、まさに大学の存立というのは、研究が何であれ、それが学生教育のなかでどのように生きているか。さらに言えば、それが地域社会のなかでどのように生きているかを問う得るかでしょうか。その場が大学アーカイブズというものに求められている。そのための営みとして、まず教育という問題で考えるならば、大学史を踏まえた大学像の定義をしていく。そのためには大学のカリキュラムを点検し、大学の個性というものを不断に検討していくことが、大学アーカイブズの記録をもとにして、常に考えられなければならないことだろうと思います。

研究という意味で言えば、大学が営む研究にかかわるアカウンタビ

リティと言いますか、私の研究が社会にとって何なのか。確かにそのような点で言えば、大学アーカイブズは単なる記録ではなくて、研究成果、知を集積することがアーカイブズに問われています。ですから、アーカイブズは、大学の研究成果をどれだけ管理し、発信していかかどうかではないのでしょうか。しかも、現在のように、外部資金の導入が求められているとき、何か来たときに、大学アーカイブズがその研究成果を常に出し得るか、出せないかということが問われてくる。それは大学が持っている特許権をはじめとする知的財産について、その管理を、本来は大学アーカイブズで考えてもいいのではないのでしょうか。アーカイブズというと、常に歴史研究者や史学科などの卒業生が行くところだと思われている。最近では、せいぜい政治だとか、行政学だと思われる。でもそうではなくて、まさに情報管理や電子光学、数学などへの目配りができる人間が、これからのアーキビストには必要なのだろうと、私は思います。

そして第四点としては、大学が地域社会に何をなし得るか、開かれた大学としての場を、いかに確保するかということ。例えばそれは、小さな試みであれ、滋賀大学の近江商人三中井に対する所蔵資料をもとに、その営みの展示でしょうし、九州大学の場合で言えば、石炭アーカイブズをはじめとする、さまざまな問題提起でしょう。

私の友人が敦賀短期大学にいますが、敦賀短期大学は経営的にいぎづまっています。それで、敦賀短期大学が敦賀の研究センターの一つとして、どう生き残るかという話をしました。敦賀の場合で言えば、あそこは原簿の交付金に支えられているわけですから、それならなお

さらること、あなたのところは原子力アーカイブズをつくる提言をしたらどうか。原発の所在地では、いま原発はこんなにいいですよと、いろいろとものすごく金をかけた展示館があるけれども、その背景にある多様な記録は展示されていないわけです。ですから、むしろ原発の故地敦賀として、敦賀短期大学が持っている保存修復などの技術をふまえて、原子力アーカイブズをつくる提言をしたらどうか。それによって、日本の原子力情報というものをきちんと体系的に残していくならば、原発や何かに対する不信に対しても、すぐに答えられるだろう。原発をめぐるアカウンタビリテイの器となるべく原子力アーカイブズを提案してみたらという話をしたのですが、さあ具体的にどうなるでしょう。できれば、私は大変おもしろいと思います。というのは、企業アーカイブズがきちんとしていないかぎり、日本の企業は国際戦場では勝ち残れないのではないのでしょうか。

第五点は、学校教育、社会教育、生涯教育等というものに、特に大学アーカイブズはどのように結びつくか、かかわれるかということだ。現在は博字連携というようなことが言われておりますが、広島大学にしても、教育学部をはじめとして教員養成をやっているわけです。日本のアーカイブズ、自治体アーカイブズは、教育委員会サイドが非常に多い。そうすると教育委員会サイドの人たちは、教育委員会であるがゆえに、首長部局でないがゆえに記録資料が集まらない。そうではなくて、教育委員会にある組織ならば、学校教育の場に記録というものの持つ意味を説き、そのなかにおいて、歴史を自分の目で新たに読み直すことを考えていく。あるいは生涯教育なり、学校が社会教育

の場において、そのことを主張していく。そういう課題を考える。

文書館（もんじょかん）と称したがる背景には、唯一しかない文書、紙資料を扱うのがアーカイブズで、本を扱うのは図書館で、物を扱うのは博物館だというような腑分けの論理があります。この呆けた腑分けはそろそろやめにして、図書館、博物館、あるいは歴史館のようなものは、一つの情報を発信する、あるいは情報を資産として共有し得る場であるという認識を持つべきです。そうすれば、その情報を共有するという輪のキーステーションがアーカイブズで、そのような意味において、いかにそれぞれの持つている情報をアーカイブズが把握し、整理して発信していけるか。その点で言うならば、図書館、博物館、歴史館というものが、一つの輪になるかたちで考えていく必要があると思います。さらに、アーカイブズのデジタル化がはじまるならば、なおさらのことデジタルアーカイブというものを出すことによって、いままでの遠隔地教育というか、僻地教育においても新たな教育の覚醒が可能となります。

第六点として、特に広島大学のような医学部のあるところで言えば、医事情報だとか、理工学系の情報というものをどれだけ集積できるか。特に私は、医事情報の集積というのは大事だろうと思う。例えば、誤診などが問われるとき、医学の説明責任を医学部内でやるのではなくて、大学アーカイブズがきちんと体系を立てて、いつでも出せる。そのことによって、大学の医学教育というのも新たに覚醒し得る。

そういう意味において、大学は知を共有する営みをとおり、大学自体がそれなりに強くなっていくことが求められているわけです。と言

いますのは、日本の学問の受け入れ方については、明治の末年に、東京帝国大学のお雇い外国人であったベルツという医者がいましたが、その大学の医学部の教員が全部日本人になったので、ベルツは大学から解雇されます。国へ戻るときに、彼は最後の演説を、小石川の植物園でのお別れパーティーでしております。そのなかでベルツは、大変辛辣なことを言っています。「私は、あなたたちに西洋の医学の最先端のものを教えた。そして、その最先端の知識というものを生み出すために、ソクラテス以来、どれだけ私たちの先輩たちが血と涙と汗を流したか、そのことを学んでほしかった。しかし、あなたたちは一番新しい木の実を食べることは一所懸命したけれども、その根っこを見ることはしなかった。これからは、その根っこを見てほしいんだ」と。

日本におけるアーカイブズ文化の、ある点で言えば、非常に不毛で未熟なのは何かというと、この問題とかかわるのだろうかと思えます。それぞれの知の府としての大学が、まさに大学としての存在根拠を確立し、知の府としての大学の自己主張をするのであれば、そこで営んだ多様な知の記録をアーカイブズがどれだけ集積をし、それを発信し得るかということ。いま、まさにやっとならぬ地平に立ったのだろうかと思えます。そのような意味で言えば、大学アーカイブズは、まさに知の原点への芽を育てることです。その芽を育てるということは、大学をいかなるかたちで経営していくのかということにかかわる営みにほかなりません。

そうした点で、この営みを続けるなかで大学がいかに生きるか。現在の大学を少しでもよりよい大学にするために、その政略に向けて具

体的戦略を担うのが、大学アーカイブズではないでしょうか。そのためにこそ、大学を支える知をいかに有効にし、組織的、体系的に取り込んで、構成員に知らせ、知を共有していくなかで、明日の大学というものを担える大学コミュニティをつくっていくことが問われているのです。いまこそ大学アーカイブズは、大学の貌になるべきだし、大学アーカイブズを担う者はそういう強い自覚を持つ必要があるのではないのでしょうか。また一方で、大学の貌という意味で言えば、常設展的なかたちで常に大学の貌を社会に知らせていく。特にこれからの学生、受験生が己にふさわしい大学とは何かを問うかたちで選ぶのであれば、まさに入試戦略としても、大学の貌を世間に提示していくことがいるわけです。そうしたなかにおいて、その貌の秘めた世界、貌を貌たらしめている知の営みを組織的に発信し、その情報発信基地たる使命を担うのが大学アーカイブズではないでしょうか。

私は「この国のかたちは、どのようなかたちにしたいのですか」ということをよく言うのですが、やはり国立公文書館は国のアーカイブズとして、そういうことを問いかけていく場だろうと思えます。しかし残念ながら、いま私がいる国立公文書館の展示場というのは、展示場としてつくられたものではありませんから、それがきわめて不十分です。また、それをやるだけの記録も十分に残っていません。しかし、本来はそういうものがあってこそ、国民が国民として日本の国のかたちに思いをめぐらせ、アーカイブズが明日の歴史を読み取る場となるのです。自治体アーカイブズならば、自治体アーカイブズはそういうことをすべきで、そういう情報発信をし得るかどうかがまさに問

われています。

私は大学アーカイブズに一番期待しているのです。大学アーカイブズというのは、自分の手でさわれる世界なのです。それだけに、そのような意味合いにおいて、自らコミュニティの貌を知ることが具体的に可能です。それは、スウェーデンが新しく生まれ変わるときに、ニルスの旅の物語をとおして、スウェーデン国民が記憶を共有していった。それと同じようなことが、大学の貌としてのアーカイブズというものに求められているのではないのでしょうか。その点で言えば、大学アーカイブズは、大学の教育研究を組織的に組みあげ、その営みを不断に点検し、大学を覚醒していく。そういうなかで、時代に応じた政略を立て、戦略を具体化する器、まさに大学のマネジメントというものを考える。あるいは、ガバナンスを考える上において、大学アーカイブズの記録を、どれだけ有効なかたちで蓄積し、組織の記録として残していつているか否かが、これから問われます。これから外部資金などの問題があればあるほど、どれだけ即応的に大学アーカイブズが対応し得る記録を担っているのか、記録を持っているかということが問われる。

そのためには、かなり苦しい状況だろうと思いますが、まず大学内で、大学アーカイブズの存在をどのように認知してもらおうかという問題に取り組まねばなりません。このような認知の問題において、ある意味で一番の抵抗勢力は、おそらく文学部的なところではないかと、私はいままでの見聞で抱えています。筑波大学で文書館ができなかったときの問題で呆れたのは、教育や体育系の人間でしたが、金栗

翁の地下足袋がある、オリンピックの金メダル、ああいうのを入れてくれるならいいと。ちよつと待つてよ、それはアーカイブズとはちよつと違うのよ、ということを言ったのですが、まずそこからくるのですね。過去の栄光にただすがりつくのではなく、かびがはえた歴史を金科玉条とするのではなく、明日をつくる糧としての歴史を生むために、大学アーカイブズは必要なのです。そうすると、存外、論理的説明に理解を示してくれるのは、自然科学系の人たちでした。特許権はちゃんと発信してあげますよ、医療情報はちゃんと管理しますよと言ったら、存外、一番金を持つている組織が出てくれるかもしれないという気はしているのですが。

そのへんは小池館長の力に期待して、つたない話を終わります。ご清聴ありがとうございました。

(おおはま てつや・国立公文書館理事・北海学園大学教授・筑波大学名誉教授)